

浅井 建爾

Vol

3

かつて東京より人口の
多い県が十六もあった！

日本の首都東京には、日本の総人口の一〇%以上の人が集まっているという超過密ぶりだが、明治時代の東京は決して人口の多い地域とは言えなかった。一八八〇（明治十三）年の県別の人口を見ると、東京府より人口の多い県が実に十六もあったのである（別表参照）。現在の東京しか知らない人には信じ難いような数値だと言える。当時の東京府の人口は九十五・九万人と、百万人にも満たなかった。それに対し、北陸の石川県は東京府の二倍近い人口（百八十三・四万人）を有していた。もっとも、当時の行政区分と現在のそれとは、境界線が異なっていたので単純に比較するには少々無理もあるのだが。

四十七の都道府県が、当時は三府三十六県と開拓使（北海道）の四十に区分されていた。例えば、石川県は富山県と福井県（旧若狭国を除く）を管轄していたし、島根県は鳥取県を、愛媛県は香川県、高知県は徳島県、長崎県は佐賀県、鹿児島県は宮崎県、それに今は消滅している堺県は、大阪府の南部と奈良県とで一つの県を構成していた。また、東京府は現在の東京二十三区の範囲及び伊豆諸島と小笠原諸島を領域としており、三多摩地区は神奈川県を管轄した。このように、行政区分の違いは多少あったものの、日本の人口は未開地だった北海道（開

拓使）を除けば、全国にまんべんなく分布していたと言っよい。

それというのも、明治時代の日本は食料自給率一〇〇%の純然たる農業国だった。そのため、むしろ地方で多くの労働力を必要としていた。地方の県が比較的人口の多いのはそのためでもある。ところが、日本の産業が発展していくに伴って、農村から大都市に人口が流入するようになった。特に日本が高度成長を遂げた昭和三十年代に入ってから大都市圏、とりわけ東京及びその周辺地域の人口増加率は際立っていた。

例えば、東京に隣接する神奈川県の当時の人口は、わずか七十五・七万人に過ぎず、全国平均を大きく下回っていた。しかも、この神奈川県は三多摩地区を加えてのものである。現在では、神奈川県に三多摩地区の人口を加えると千三百万人にも達する（二〇〇九年二月末）。実に十七・三倍の伸びである。これに対して石川県はというと、富山県及び福井県の旧越前国の範囲を加えて当時と同じ県の領域にしたとしても、人口は二百九十三万人（当時の一・六倍）に過ぎない。北陸三県で百万人余り増加する間に、神奈川県（三多摩を含む）は千二百万

人以上も増えたことになる。山陰の島根県も当時は百三・七万人と、全国十二位の人口を誇っていた。ところが現在の人口はどうだろう。鳥取県を加えても百三十一・七万人（一・三倍）、わずかに二十八万人増えたに過ぎない。ほかの地域についても同様のことが言える。この表からも分かるように、かつては東京や大阪などの都市部の人口はさほど多いとは言えなかったのである。

近年、大都市圏への過度の人口集中が大きな社会問題になっている。大都市だけが栄え、地方が衰退していく日本の現状を好ましいものだと思うている人は誰もいないはずだ。一世紀余りの間に生じた大都市圏と地方との極度の歪み、それをどれだけ改善していけるのか。明治時代のような、バランスのとれた人口分布にどれだけ戻していくことができるのか。日本人がこの国に生まれてよかったと思えるような、健全な発展を遂げていくには、これらの問題の解決なくしてはあり得ないような気がする。それを実現することが、国がこれから取り組んでいかなければならない大きな課題の一つと言えるだろう。

明治時代の日本の人口 1880(明治13)年

府県名	人口(万人)	順位
石川	183.4	1
新潟	154.6	2
愛媛	143.9	3
兵庫	139.2	4
愛知	130.4	5
鹿児島	127.0	6
広島	121.3	7
長崎	119.0	8
高知	117.9	9
千葉	110.3	10
福岡	109.7	11
島根	103.7	12
岡山	100.1	13
長野	100.0	14
熊本	98.7	15
静岡	97.0	16
東京	95.9	17
堺	95.7	18
埼玉	93.4	19
茨城	89.4	20
山口	87.8	21
三重	84.2	22
岐阜	84.0	23
京都	82.2	24
福島	80.9	25
神奈川	75.7	26
滋賀	73.8	27
大分	73.2	28
山形	68.3	29
秋田	61.9	30
宮城	61.9	30
和歌山	59.8	32
岩手	59.2	33
大阪	58.3	34
群馬	58.2	35
栃木	58.1	36
青森	47.5	37
山梨	39.5	38
沖縄	31.1	39
開拓使	16.3	40
全国	3592.5	

日本帝国統計年鑑(統計院)